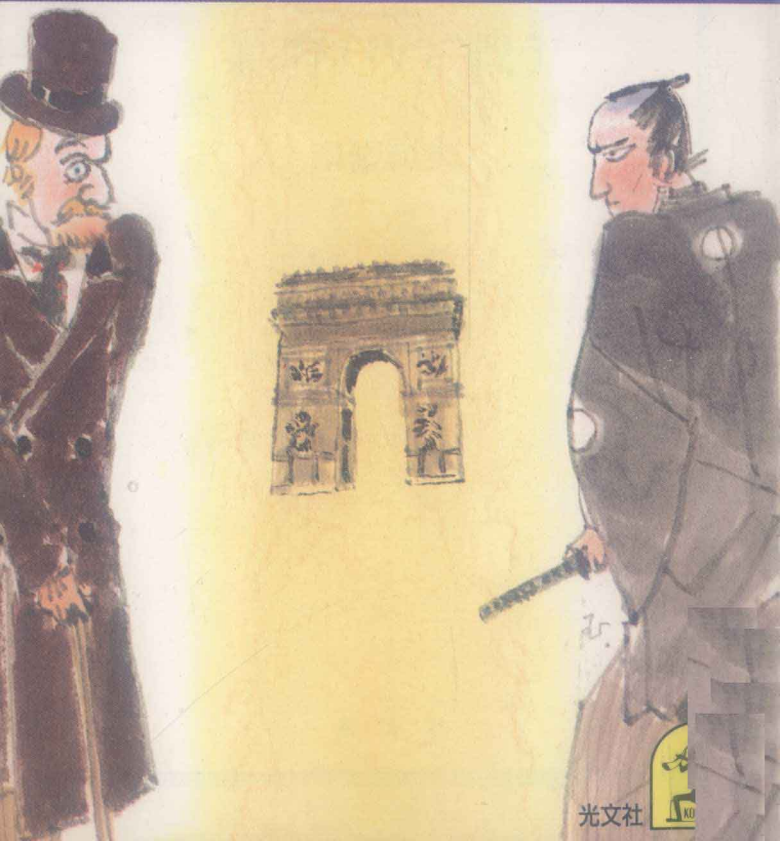


光 文 社 時 代 小 説 文 庫

幕府、パリで戦う

長編時代小説 南條範夫



光文社





光文社文庫

長編時代小説

幕府パリで戦う

著者 ^{なん}南 ^{じよう}條 ^{のり}範 ^お夫

1994年2月20日 初版1刷発行

発行者 大 坪 昌 夫
印刷 豊 国 印 刷
製本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03(3942)2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Norio Nanjō 1994

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71843-4 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3269-5784）にご連絡ください。

光文社文庫

長編時代小説

幕府パリで戦う

南條範夫

光 文 社

『幕府パリで戦う』目次

九十歳の老翁……………	7
ロセスと幕府……………	20
パークスと薩摩……………	34
小栗上野という男……………	49
青年渋沢篤太夫……………	63
愛想のよい通訳……………	78
航西日記……………	93
丸に十の字……………	107
万国博覧会……………	121
パリの夜……………	135
虚々実々……………	150
皇帝謁見式……………	165
傷ついた威信……………	179
皇后の風呂番……………	194

パリで瘦 や せる篤太夫……	209
二座競演……	224
競馬場の椿事 ちんじ ……	238
安芸守 あきのかみ 派遣……	253
巡国日録……	268
ミス・ジェーン……	282
大政奉還……	297
借款 しゃつかん 問題の帰結……	311
公子の恋……	326
英国政府 イギリス のスパイ……	341
最後の抵抗……	356
幕府敗れたり……	370
老翁の微笑……	385
解説 縄田 なわた 一男 かずお ……	399

九十歳の老翁ろうおう

昭和四年の二月末のことである。貧乏大学生の私は、飛鳥山あすかやまの渋沢子爵邸しぶさわの前に立ったとき、さすがに少なからぬ氣おくれを感じた。

なにしろ邸やしきの主は、明治から大正にかけて、銀行・鉄道・鉱山・汽船・製鋼・造船・製紙・紡績・ガスなどあらゆる産業の指導的地位に立ち、第一線から退いた当時でも、日本はおろか世界的な名士として、財界の太陽と呼ばれている人である。

年齢も、私の四倍を確実に越えていた。

——出しやばるんじやなかつた。

私は、前日来の昂たかぶった気持ち、急に萎なえてゆくを感じた。

だが、B——誌の『編集室』で、子爵渋沢栄一しぶさわ えいいちに会うといい出したのは、ほかならぬ私自身なのである。

私は、学費稼かせぎにB——社の仕事をしていた。知名の人の原稿の代筆をしたり、そういった人たちの意見を聞いてまとめたりするのだ。私が最初にやったのは、日本女性として初めてス

カラ座の舞台で唱ったS——という高名な歌手の原稿代筆である。巨大な体軀を持ったS——嬢は、声はすばらしかったが筆のほうはまるでだめだったのだ。

私は、上野図書館に行つて数冊の本に目を通したうえ、その大空が、コバルト色に輝く音楽の都ミラノで、全世界の歌手の憧憬の的であるスカラ座のステージに立ったときの、大波の崩れるような感激について書いた。

そいつが案外好評だったので、B——社では引き続き、同じような仕事を与えてくれた。

眼前に突きつけられた鉄砲もともと、相手を一刀のもとに斬り捨てた満州馬賊K——、アフガニスタンで十二年暮らした男D——、私の母は西郷さんの恋人でしたという乙女——などの手記をつぎつぎに私は書かされた。

後藤新平に会つて、東京市長時代の思い出を聞いたり、往年の大力士太刀山に現代角力道の改革に関する意見を聞いたり、七歳のチンピラ女優の舞台感想を拝聴したりした。

渋沢栄一氏に会わなければならなかったのは、そうした仕事のひとつとしてである。

青年の左傾化について——という特集で、各界の代表者にインタビューをするという計画を立てた編集長が、

「財界から、誰にするかな」

といい、みなが考え込んでいるとき、たまたま編集室に顔を出していた私が、ふっと、

「渋沢さん——どうですか」

といつてしまつたのだ。

「渋沢さんなら問題なく、財界代表者に違いないが——会ってくれるかな」

さあ、と編集員たちは、自信のなさそうな顔になつた。渋沢氏が九十歳の老齢で、いまだに朝から晩までいろいろな仕事に忙殺（びやうさう）されているということは、周知のことだったからである。

「私が会つて来ましようか」

またしても、私はふつと口をすべらした。私の悪い癖（くせ）である。

「君が——できるかい」

編集長は、驚きと皮肉とを交えた目つきで私を見返した。

「だめかもしれないが、やってみます」

と私が少し意地になつて答えたのは、多少の心当たりがあつたからだ。私の大学における民法の先生穂積重遠（ほづみしげと）博士は、渋沢栄一の外孫（がいそん）に当たる。穂積教授に頼んで紹介してもらえば、会つてもらえるだろう——とつきにそう考えたのである。むろん、そんなことは、口には出さなかつた。

編集長は三〇パーセントぐらいしか信用していないような顔で、ともかく私にその仕事を委託した。

幸いにも穂積博士は意外にあつさり私の願望を受諾してくれ、即座に電話で渋沢氏の秘書と連絡し、面会の日時を決定してくれた。

私はその日までの三日間、渋沢氏に関するあらゆる刊行物を読みつづけた。

そして、いまや、編集長の鼻をあかしてやるという意気込みと、渋沢氏に会えるという期待とで、すっかり興奮して飛鳥山までやってきたのだが、いざとなると、情けないことに、胸がどきどきしてくるのを、どうしようもなかったのである。

応接間に案内された。

そこに、渋沢氏の顔があつた。写真では熟知してゐる顔だつた。円くて皺だらけだ。鼻翼から口もとに下がっている皺がことに深く、柔和な表情に、一脈の厳しさを与えている。長命の人にしばしばみられるように鼻の下が広く長い。瞳が、老人とは思われないきらめきをもっていた。

九十歳という、私にはほとんど想像のほかにある年月を生きてきた人に会うと、私は人間というよりも、妖怪のような気がする。ましてその人が、私にとってはすでに歴史上の事件になっている明治維新をその身で体験し、その後、日本資本主義のパイオニアとして、超人的な活動をつづけてきた人というのは、偉い人という感じよりも、違う世界に住むデーモン（魔神）のようにさえ思われた。

だが、口を開いた渋沢氏の声は、ただの優しい老人のそれであつた。

私に与えられた時間は、十五分である。その間に順序よく質問するつもりで考えて来たのだが、その第一問をど忘れしてしまつて、私があわててゐる様子をみて、渋沢氏のほうから、助

け舟を出してくれた。

「若い人たちの左傾を、どう思ふかということでしたね」

当時、青年学徒は滔々^{とうとう}としてマルクシズムの潮流に押し流されていた。革命の夢が彼らの頭を真つ赤な炎で燃やしていた。共産党の第一回大檢舉が行なわれたのは、この前年の三月十五日であつた。

政府も、財界も、学界も、この情勢に震え^{ふる}上がつていたのである。

私は、渋沢老人が何をいい出すか、息を詰めてつぎの言葉を待った。

「私は、その問題については、ほんとうのところは、たいして心配はしていませんよ」

渋沢氏は、そういつた。日本資本主義の精髓ともいうべきこの老人が、そうした自信を持っていることはべつに不思議ではない。私も、そのくらいの回答は予期していた。

だが、その次に聞いた渋沢氏のひと言に、私は思わず、目を見張つた。

「私も昔は、マルクスボーイの一人だね」

老人の、いつも微笑しているような表情が、そういつたときは、はつきり大きく笑つていた。「むろん、私の若いころはマルクスなんていう名前は聞いたこともない。そのかわり、尊皇^{そんのう}攘夷^{じやうい}という言葉があつた。各藩の下^{した}端^はの武士や、地方の郷士^{ごうし}や豪農の若い子弟が、夢中になつてこの言葉に飛びついた。考えてみればむちやな話でねえ、武力も財力も何もない素寒^{すかん}貧^{びん}の若造が、二百七十年の歴史と、強大な兵力と財力——少なくとも当時はそう思われてい

た——を持つてゐる幕府に挑戦してこれを叩きつぶし、格段に發達した新鋭の文明をもつ外国勢力を追い払おうとしたのだから——親がかりの学生諸君が、三十万の常備軍を持つ日本政府をぶつ倒そうと夢みているのと同じようなものでしょう。維新当時のいわゆる志士などというものは、まあ、いつてみれば、今のマルクスボーイみたいなものだ。埼玉県の田舎の農家に生まれた私も、尊皇攘夷論に熱中して、あつぱれ天下の志士気取りで、仲間を集めて幕府を叩きつぶしてやろうとまじめに考えていた。だから父親が心配してねえ。ちやうど今の左翼学生を持った父親と同じ気持ちだったんでしょな。もつとも、私の父は理解のあるひとで、私のしたいようにはさせてくれたが、内心おちおち眠れなかったんじゃないかと思う」

渋沢氏の伝記をひととおり読んでいた私は、そのことは知っていた。

渋沢氏が生まれたのは、武蔵国榛沢郡血洗島、今の埼玉県大里郡八基村である。渋沢氏は農家だったが、農耕・養蚕のほかに、藍商、荒物商を兼ね、金融業も行なっていたらしい。十四歳のとき、ペリーの来航があり、十九歳のときは、安政の大獄という激動する時勢の影響下に、尊皇攘夷論者となった。

文久三年（一八六三年）二十四歳のとき、同志とともに討幕攘夷の実践を計画した。

ひそかに武器を集め、同志六十九名をもつて高崎城を乗っ取り、義軍を募つて横浜に侵入し、焼打ちを敢行して在留外国人を皆殺しにし、幕府を窮地に追い込もうというのである。

この無謀な計画は、実行まぎわに同志の自重論によつて崩壊し、渋沢氏は従兄の喜作とと

もに、京都に逃れ、旧知の一橋家家臣平岡円四郎を訪ねる。そして、結局、一橋家に出仕する運命となってしまうのだ。

こんなことは一応知っていたのだが、維新の志士を一種のマルクスボーイだという見方は、私には非常に新鮮なものに思われた。

「ところが、その私がね、徳川の御三卿の一つである一橋家に仕え、一橋慶喜公が將軍になられると、自然に幕臣になってしまったのですからね。尊皇討幕論者、いや、それを実行しようとした私が、当の仇敵の幕府の家来になってしまつて、そのうえ、攘夷論者一転して、最も熱心な泰西文明輸入論者になつてしまつた。面白いものですね。今のマルクスボーイ諸君も、大学を出て就職でもすると、数年後には最も忠実な課長か部長になつて、会社のために粉骨砕心するんじゃないやありませんかな」

渋沢氏の円い顔が潰れたようになり、顔じゅうの皺が動いた。また、笑つたのである。

「当時の若い連中が、尊皇攘夷という旗印に飛びついたのは、何よりも現状に不満だつたからだ。こんな状態じゃいけない。生きている甲斐がない。もつとよい人生があるはずだと考えていたから、現状を打破することが可能と思われる旗印に、命をかけて飛びついていった。マルクスボーイ諸君も同じことじゃないのですかな。本人の環境が変わってくれば、考え方もおのずから変わってくる。元来攘夷論だつた維新の志士のすべてが、後に開国論者になり、泰西文明を謳歌するようになっていゝのですし」

「しかし——」

私は、熱くなつて口を容れた。

「少なくとも、往年の志士たちは、幕府打倒という目的は果たしたではありませんか」

「そう、そうですね。だが、そのかわり、薩長中心の藩閥政府を作り上げてしまった。多くの志士たちが期待していた一君万民の新政権とはまるで違ふ。その藩閥政府のために、明治以来、われわれ民間人はどれだけ威張り散らされ、どれだけ苛められたかわかりませんよ」

私には、なんだか話の論点がごまかされてしまったように思われたが、どこでどうごまかされてしまったのかよくわからず、なんとかしてこの老人を、とちめてやりたいといらいらしてきた。

「尊皇討幕論だった先生が、どうして一橋家に仕えたり、幕臣になつたりされたのですか。先生の伝記を読んでみても、そこがどうもはつきりいたしません」

「それは私にも、はつきりわからない。先刻いったように、マルクスボーイが、忠実な課長になるようなもので、そのときどきの環境のせいでしょう。具体的には、一橋家に仕えるようになったのは、京へ逃げてから幕府の追及の手を脱れるという気持ちもあつたし、ぶらぶらしてゐては生活に窮してくるという点もあつた。しかし、幕府を倒さなければならんという気持ちは、依然持っていたでしょうね。一橋慶喜公が將軍になつたので、私も幕臣ということになつてしまったが、もうそのころは幕府がそう長く続くとは思つていないし、また、存続させるべ

きでもないと思つていた。まあ、幕府にとつては不忠の臣ですね。パリで、大政奉還のことを聞いたときにも、同行の人たちは、まさかそんなことがあるものかと誰一人信用しなかったが、私は、当然来たるべきものが来たと考えてね、それを口外して、ずいぶんみなに憤られましたよ。しかし、私は昔氣質だから、幕府が倒れても、いったん臣下となった以上、慶喜公の家は潰したくないと考へて、その後も、自分としてはできるだけのこととはしてきましたがね」

これも、私はよく知つていた。だが、やつぱり釈然としない。

「どんな理由があるにせよ、幕臣になりながら、幕府が倒れてもいい、あるいは、倒れるべきだとお考へになつていたのは、どうも納得できないのですが」

「それはね、もともとは、尊皇論から来ている。幕府が政權を握つているのはけしからんという——しかし、後には、もっと現実的な理由から考へるようになった。というのは、勝（海舟）さんなんかの影響もあつたでしょう。幕府と薩長らがいつまでも争つていては、外国の勢力が介入してきて、大変なことになる。どんな犠牲を払つてでも、国内の争いを早くやめなければならん。それには幕府が倒れる以外にない——と考へるようになったからだ」

渋沢氏は安樂椅子の上で少し、からだを起こした。

「明治維新というものは、薩長と幕府の争いというふうにみられているし、事実そうした一面が非常に強いのだが、同時にあれば、イギリスとフランスの戦いだつたからね。両国とも直接には経済的利益を狙つたので、始めから領土的野心があつたとは思われないが、日本国内の内